

貨幣的循環理論¹の構造と問題（一）

竹 永 進

目 次

1. はじめに
2. (信用) 貨幣の創造と基本性格
3. 貨幣の尺度機能 (以上本号)
4. 貨幣の購買力と価格 (絶対的、相対的)
5. 金の役割り
6. 労働 (力商品?) と賃金
7. 利潤の発生
8. 利子の支払い
9. 貨幣と金融
10. 資本財とその調達
11. 期間という分析枠組み
12. 均衡と不均衡
13. おわりに

¹原語は *théorie du circuit* ないし *circuit theory*。直訳すれば循環理論となるのであろうが、貨幣の循環的運動を中心として資本主義的市場経済を分析するというのがその趣旨であり、*circuit* を単に循環とだけ訳したのでは (特にこの理論がほとんど知られていない日本では) あまりにも漠然としていると考え、あえて「貨幣的」という接頭辞を付加した。サーキュイット理論とすることもできようが、すでに呼称が日本の文献で定着しているものなどどうしてもやむをえない場合を除き、なるべくカタカナ表記は避けたいと思いあえて耳慣れない訳語を考案した。筆者の知る限りではこれまで日本でこの理論について論じた文献は、断片的に言及したものを除くと、次の2点のみである。香内 力「Circuit Theory とその種差性」(『早稲田経済学研究』第44号、1997年)、同「Alvaro Cencini の貨幣理論」(同誌同年第45号)。

1. はじめに

1996年に刊行された Deleplace と Nell の編集による論文集 *Money in Motion*² は、英米系のポストケインジアンとフランス・イタリアのサーキュレーション・アプローチとの共同による、新古典派正統の実物的接近に対抗する貨幣的テーマをめぐる論考を集めたものであり、両者の学問的交流を象徴するものである。ただし、編者のひとり Deleplace が言うように、「新古典派的思考の批判者たちのあいだにはほとんど合意はなく——批判点についてさえ！——、代替的分析の確立したシェーマがないのはいわずもがなである」³、というのが非主流派経済学の全体的な状況であり、この論集もその例外ではないであろう。このような企画の実現は、たしかにこれら二つの経済学の流れにある種の共通性があることによるのであろうが、しかしそれ以上に、両者が共に対抗関係にある新古典派一般均衡論の支配力の拡大という前世紀70年代中葉以来の理論経済学の世界の状況のしからしめたものであろう。この論文集ではポストケインジアンに対してサーキュレーション・アプローチ⁴と一括されているグループも、このような一括を許す共通性を持ちながらも、貨幣的アプローチあるいは異端派 (*approche monétaire, hétérodoxes*) と貨幣的循環理論派 (*circuitistes*) をそれぞれ自称する、やや性質を異にする2つの流れからなっている。本論文集の執筆者のうち、ポストケインジアンに属する論者の名前や仕事は日本でも比較的良く知られているものが多いが、他方のグループに属する論者のそれは少数の例外を除き日本ではほとんど知られていない。のみならず、彼らの議論はフランス(語圏)とイタリアでも自称どおり少数派に属し、それ以外の諸国では少なくとも最近まではほとんど流通圏をもっていなかった。

筆者は上記の異端派の中心メンバーのひとりである Deleplace の著書の翻訳⁵に加わっ

² *Money in Motion, The Post Keynesian and Circulation Approaches*, edited by Ghislain Deleplace and Edward J. Nell, Macmillan, St. Martin's Press, 1996.

³ Ibid. p.3.

⁴ この呼称自体定着したものではない。つまりこういうくくり方は不可能ではないが、くくられている当事者たちが進んで受け入れるものでもないであろう。むしろ、それまで相互にほとんど交流のないままに議論を続けてきた二つの流れを、ここでとりあえずひとまとめにしたと言った方が実情に近い。

⁵ ジスラン・ドゥルプラス『「政治経済学」とマルクス主義』高須賀義博監訳、岩波書店、1988年 (Ghislain Deleplace, *Théories du capitalisme : une introduction*, Maspero, 1979)。

たことはあるが、これまで彼らの仕事についての検討は棚上げにしたままにしてきた。今回ようやく機会を得て関連文献のサーベイを試みてみたが、まったく理論的・研究史的文脈の異なる日本から彼らの議論を評価検討しようとするとき、貨幣的アプローチは、当事者にとっては距離があり異質なものと意識されているように見える貨幣的循環理論と、理論的枠組みをかなりの程度において共有しているように思える。しかも、前世紀80年代以後は貨幣的アプローチと同時並行して議論を展開してきた貨幣的循環理論は、前者に対して時期的にやや先行していたのであり、この点からも後者は前者のバックグラウンドをなしていた可能性があるのではないかと考えられる⁶。この意味で貨幣的循環理論の論理構造と問題性について検討することは、貨幣的アプローチの理論的性格と問題をそれが明示的には語らない面も含めて明らかにしうることが期待される。もちろん両者間には共通する面とともに乖離する面も多くある。この関連と差異をひとつの手がかりに貨幣的アプローチの意義と問題を解明することが目標であるが、さしあたり本稿ではその前段としてもっぱら貨幣的循環理論についてだけ検討することにしたい。

さて、貨幣的循環理論は一般均衡論への対抗理論として登場したのであるが、きわめて多様な学説史的な背景を有しており、当事者たちにとっても彼らの理論がまったく新しい

⁶ 貨幣的アプローチに属する論者の仕事は、そのほとんどが *Intervention en économie politique* という Maspero を版元としていた叢書(注5の Deleplace の著書もその一冊。80年代中葉に版元が *La Découverte* に取って代わられたときをもって終了)と *Cahiers d'Économie Politique* という不定期刊行誌(こちらは現在も継続)に収められている(ただしこれは叢書継続期間中のこと)が、68年後の70年代前半から開始されるこのグループの仕事には、もともとは貨幣を基軸にすえた貨幣的アプローチはなかった。だが彼らの仕事は70年代末を転機に貨幣的アプローチに急激に変化している。この転換を画したのが Deleplace の上記著書とその翌年に同じ叢書の一冊として刊行された Carlo Benetti と Jean Cartelier の共著 *Marchands, salariat et capitalistes* であった(ただし、Deleplace の79年の著書は不徹底な面を残しており、おそらくこのために、88年刊の日本語訳の作成の過程で著者はこの書物の理論的主張の決定的な点にかかわる多数の削除と追加を行った。訳書にはそのことは明示されていないが、この日本語版はまだ若干79年頃までの見解を残した著書の88年版とも見なしうる)。すでにその時期までに、信用貨幣論と独自の関係的価値論をもとに、(細部のつめはともかく)発想の大枠を提示していた貨幣的循環理論とりわけ Bernard Schmitt の仕事は、この転換において無視し得ない役割を果たしたのではないかと推測される。この転換は同時に、マルクスに対する彼らの評価の大きな変化(古典派や新古典派の *économie politique* とは根本的に異なる資本主義経済の理論から、基本的には *économie politique* の一変種——労働価値論と商品貨幣論——でしかなくこれと共に棄却されるべきものへ、という変化)もともなった。

独創的な理論であるとは必ずしも見なされていない。そのルーツをたどれば、遠くは18世紀初頭のジョン・ローの発券銀行論、ケネーの経済表に描かれた貨幣の循環によって媒介される諸階級とその関係の再生産の図式、そして、ジェームズ・スチュアートの譲渡利潤論、また、19世紀中葉のトゥークに代表される銀行学派の内生的貨幣供給論、利子を利潤からの派生的収入としてとらえる古典派やマルクス、マルクスの再生産論（ただしマルクスの価値論を受け入れる論者はいない）、さらに、ヴィクセルの純粹信用貨幣論、シュンペーターの企業家と銀行の関係を軸とした経済動態論、といった非常に広範囲の学史的なつながりを持つが、この理論のとりわけ大きな発想源となっているのがカレッキの投資・利潤関係と収入の分配の理論、そしてケインズの貨幣的経済理論である。「何年か前から、貨幣と生産のあいだの繋がりを強調した比較的少数のフランスの経済学者グループが存在する。『一般理論』と『貨幣論』の双方に基礎をおく彼らのケインズ理論解釈が、貨幣的循環理論あるいは動態的循環理論とよばれるものの内実である。」⁷「Marjolin と Barrère から Denizet にいたるまで、ケインズが主要な想源であった。Schmitt (66)⁸におけるパティンキンの〔貨幣を物々交換経済に統合するための — 引用者〕解法の棄却と『一般理論』の再解釈が、おそらく現在のサーキュレーション・アプローチに主要なインパルスを与えたであろう。」⁹この引用文に述べられているようにサーキュレーション・アプローチに属する論者たちにとってケインズはきわめて大きい存在であり、ケインズ理論は彼らにとって自らの理論の主要源泉であるとともに解釈的研究の対象でもある。ただし本稿では、筆者の能力と準備から、以上にざっと挙げた学史的なコネクションについては検討対象外としたい。「外側から見る」という筆者のスタンスからしてこの点は本稿に大きな欠落を残すものであるが、いかんともしがたく読者のご了承を願うほかない。

学史的なコネクションとならぶもうひとつのコネクションは、管理通貨制度のもとでのフランスの貨幣・金融制度の特性である。「フランスでも、正統的な貨幣経済学に不満を感じる経済学者の新しい潮流が現れた。これらの経済学者たちは、貨幣創造とその制御についての支配的なアメリカの教科書式の解釈が与える制度的枠組みは、フランスの銀行シ

⁷ Marc Lavoie, 'Une synthèse de la théorie du circuit', *Economie et sociétés*, No.9, 1987, p.66.

⁸ Bernard Schmitt, *Monnaie, Salaires et Profits*, PUF, 1966.

⁹ Deleplace, G., 1996, *ibid.*, p.10.

システムには適用しえないと感じた。この点は以前にも何度か指摘されていたとはいえ、〔…〕貸越経済の経済学者であるフランスの経済学者のグループが、企業と商業銀行がそれぞれ商業銀行と中央銀行から借り入れを行う経済に生じる特殊な問題や状況を体系的な仕方で分析しようと企てたのは、ジョン・ヒックスの提起した鋭い区別の結果にほかならなかった。ヒックス（1974、p.51）¹⁰はこのような経済を貸越部門と呼び、それに対して企業や銀行が流動資産に依拠しうる経済は自律部門の一部をなすとした。貸越的見解は、フランスの中央銀行の多くの幹部職員や研究者が主張したものであったので、フランス銀行見解と呼ばれることもあった。¹¹ Deleplace は先に引用した序文で、このようなフランスの制度的な背景と貨幣的アプローチや貨幣的循環理論との関連をフレンチ・コネクションと呼ぶが、たしかにおしなべてこれらの理論では、企業の活動は銀行から発行される信用貨幣の借り入れに原則として全面的に依存し、家計は貯蓄を原則として銀行預金の形で保持し家計支出は金額の大小にかかわらず預金通貨によって銀行口座を介して行われる（クレジットカード、小切手）ことが前提されている。上に紹介されているヒックスによる区別からも明らかに、このような貨幣金融制度はいくつかの国のある時代の状況であって、決して資本主義経済に一般的にみられるものではないであろう。だとすると、フレンチ・コネクションを背景とする貨幣的アプローチや貨幣的循環理論は、資本主義経済に一般的に妥当しうる理論と見なすことができるのかどうか問われなければならないであろう。しかし、先にふれた学説史的背景の場合と同じく、この点について筆者自身で検討しうる準備はな

¹⁰「事業を（われわれはいまや金融業も含めることができるが）、次の二つの部門に分割されているものと考えることが、かなり一般的に有用であると思われる——すなわち、一つは、その流動性を流動資産の実際の所有におもに依存している部門であり、いま一つは、確実な（あるいは確実そうに思われる）借入れ能力によって主として支えられている部門である。これらの部門を、それぞれ、自律部門（auto-sector）と、貸越部門（overdraft sector）と呼ぶことにしよう（ただし、貸越部門の金融が必ずしも正規の貸越の形式をとる必要はないことに留意しよう）。自律部門が大きく貸越部門が小さい国——アメリカがそうだと思うが——もあるだろうし、また他の国、たとえばイギリス、などにおいては、貸越部門のほうがずっと大きい。」（John Hicks, *The Crisis in Keynesian Economics*, Basil Blackwell, 1974, p.50-1. 早坂忠訳『ケインズ経済学の危機』ダイヤモンド社、1977年、69-70ページ。）

¹¹ Marc Lavoie, 'Credit and money : the dynamic circuit, overdraft economics, and postkeynesian economics', in Marc Jarsulic (ed.), *Money and Macro Policy*, Kluwer-Nijhoff Publishing, 1984, p.66. 同様の指摘は Deleplace, *ibid.*, p.10 にも見られる。但し彼は overdraft economy に対比される経済を、ヒックスの auto-sector に代えて financial market economy と表現している。

く、残念ながら本稿ではここに紹介して問題点を指摘しておくだけにとどめざるを得ない。

ところで、貨幣的循環理論はその諸要素に解体してみればルーツは学説史のはるかかなたまで遡ることができるかもしれないが、しかし「Bernard Schmitt (1966、1972) は貨幣的循環理論派〔circuitistes〕の探求の開始点となった」(Lavoie 84, *ibid.*, p.66)、という言明にも示されるように¹²、この理論はさきの注8に掲げた Bernard Schmitt の1966年の著作をもって一応の大枠がまとまった形で初めて示され、その後も70年代後半まで続く彼の仕事¹³によって先導されたと見なしてよいであろう。彼との密接な関係のもとに70年代から研究成果を発表しているのが弟子筋にあたる Alvaro Cencini である¹⁴。この両者に率いられるグループは「ディジョン学派」とも呼ばれるようである。フランスにはさらに、「パリでは Alain Parguez によりボルドーでは Frederic Poulon により率いられる別のグループが存在している」¹⁵し、また貨幣的循環理論とはやや距離があるが「ニースのグループ」も存在し「その先頭にいるのが Richard Arena である」¹⁶。フランスの研究グループはおよそ以上につきと思われるが、その陣容や主要な著作物についての詳細は上に何度か引用した Lavoie (彼自身も同じ流れに属する) の84年と87年の両

¹² 注9に箇所を示した Deleplace からの先の引用文にも同様の趣旨が述べられている。

¹³ Schmitt はもちろんその後も仕事を続けいくつかの著作を公刊しているが、その多くはケインズ経済学の再検討や国際支払いの問題をテーマとしており、80年代以後の貨幣的循環理論や貨幣的アプローチの関連文献ではほとんど言及されることがない。本稿でも Schmitt の仕事の参照は、彼の1966年の著作で提示された問題領域に直接にかかわる70年代後半までのものに限ることとする。

¹⁴ Cencini については本稿冒頭の注1に紹介した香内論文を参照。ただし、Schmitt とともに、香内論文で扱われている時期の Cencini の仕事は同じ理由から本稿では議論の対象としない。ただ、香内論文を読む限りでは、基礎理論的な領域にかんしては80年代末そして90年代に入っても、Cencini の見解は師 Schmitt の66年の著作で示された大枠をほぼそのまま踏襲している——主として80年代に貨幣的循環理論の内部で闘わされたこの大枠にかかわる種々の議論(後述)にもかかわらず——ように見受けられる。

¹⁵ Augusto Graziani, 'The theory of monetary circuit', *Economie et sociétés, monnaie et production*, no.7, 1990, p.8 (これは *Thames papers in political economy*, Spring 1989 に掲載された論文をそのままフランスの貨幣的循環理論派の一部が主宰する雑誌に掲載したもの)

¹⁶ Lavoie 87, *ibid.*, p.75. このニースのグループが中心になって企画しイタリアの研究者による寄稿も多く含む貨幣的循環理論を中心とした論文集が、*Production, circulation et monnaie*, PUF 1985 である(序文は Arena と Graziani、あとがきは Kregel がそれぞれ執筆)。当時ニース大学に在籍していた Carterlier のことは Lavoie の論文ではまったく言及されていない。彼は Arena とは師弟関係にあり、この論文集にもケネーに関する論考を寄せているが、こうしたことは別に貨幣的循環理論派とは一線を画するものと見なされていたのであろう。

論文を参照されたい。フランスとならんでイタリアにも貨幣的循環理論に属する研究者グループが存在するが、その筆頭はおそらく Augusto Graziani であろう。またこのグループの中では Marcello Messori の仕事の特記にあたいすると思われる。以上、Schmitt に直接間接につながる貨幣的循環理論の学界地図のようなものをざっと提示してみたが、これで全体が見渡せるわけでは決してない。とりわけイタリアの状況はフランス語と英語で発表された文献資料のみを手がかりにしており、イタリアの研究者が主たる発表の場としているイタリア国内の研究書や専門雑誌を参照しなければ実情をつぶさに知ることはできない。だが本稿は周到な包括的サーベイをめざすものではなく、以上の紹介には筆者が今回あつた論者や文献も全部は入っていない。しかし、これまで見てきたところで主要な論者とおよその状況についての大ざっぱな見取り図にはなるのではなかろうか。

ところで、Deleplace は最近の著書の中で、おそらく彼自身も含む非主流派経済学の全般について次のように述べている。「支配的な正統派との距離をますます大きくしているこれらの異端派の二つの特徴は、それらが部分的である（若干の理論的諸問題に限定されていて一般性を主張しえない）こと、雑多である（アロー・ドブリュー的世界に代替する単一の異端派に融合しえない）ことである」¹⁷。いささかネガティブなこの性格付けは貨幣的循環理論にもそのままそっくり当てはまるように思われる。Lavoie は彼自身も属する貨幣的循環理論派の 80 年代中ごろまでの状況について次のような適切な診断を下している。「貨幣的循環理論派の基本的な考え方を確実に同定することは容易ではない。[...] さまざまな貨幣的循環理論派の提案する異なるモデルが相互に異質であるということを確認しなければならない。[...] 貨幣的循環の諸モデルはかなり初歩的で完成度が低く、大綱のみが定式化されているにすぎない。」「貨幣的循環理論派のすべてが貨幣循環の定義について一致した見解を共有しているわけではなく、これはまた貨幣の定義についても同様である。」「貨幣的循環理論派に対してなしうる主要な論難は、彼らが描くと主張する貨幣経済の表象を明確に示すことに成功していない、ということである」¹⁸。Schmitt がはじめて大まかな枠組みを提示して以来、その内部での議論は Schmitt の理論の中に含まれていた齟齬や問題を解消ないし解決しようとしたり、彼自身が扱っていなかった諸領域にこ

¹⁷ Ghislain Deleplace, *Histoire de la pensée économique*, Dunod, 1999, p.433-4.

¹⁸ Lavoie 87, *ibid.*, p.67, p.82, p.92.

の理論を拡張しようとしたりするものであったが、Schmitt 以後の議論の展開を受けてひとつのまとまった理論が提示されることはなかったし、いずれの問題についても「解決」も「意見の一致」もなく各論者ないしグループがそれぞれ種々の「解決策」や「提案」を中途半端に出しっぱなしのまま残し、90年代に入ってから全体に議論が停滞したままの状態になっている。現在も小グループ内での議論は継続しているものの、Schmitt が提示した理論枠組の内部でのこまかい問題をめぐる内輪談義にとどまっているように見える。

にもかかわらず、貨幣的循環理論派に共通するごく一般的な理論的特徴は次のようにまとめることができるであろう。具体的な内容については本論で検討することとして、ここでは理論の外枠だけを紹介するにとどめる。この理論のモデルでは、貨幣経済（≡資本主義経済）は銀行、企業、家計の3つのセクターからなる。理論が対象とするのはもっぱらこれらのセクター相互のマクロ的な総体的関係のみであり、現実には各セクターの内部に含まれるミクロ経済諸主体の行動（様式）やその相互関係は理論的視野の外部におかれる。セクター間の関係は貨幣的關係（貨幣貸借関係、売り買い関係）であり、貨幣は銀行の創造する信用貨幣である。商品（財とサービス）を生産する企業と貨幣を創造する銀行は異なる役割を演じ、同一セクターに合同することはない。前者は生産について決定する権利を独占し、後者は貨幣を創造（発行）し貸し付ける権利を独占するが、家計（賃労働）はいずれの権利からも排除されており、企業の雇用決定に従って雇用され賃金を取得することによってのみ生活手段を入手することができる。3つのセクターは「対等な」分業関係にあるのではなく貨幣経済を動かす力を異にし階層化されている。銀行からの貨幣の創造・貸付からその回収・消滅までの単位時間をひとつの期間とし、期間から期間へと繰り返される再生産において、貨幣経済の運行が捉えられる。以上は、細部の相違をのぞけば貨幣的循環理論がすべて共有するモデルの骨格であるが、このような形で理論を最初に提示したのがすでに何度も言及した Schmitt の 1966 年の著書である。

そこで、以下まず Schmitt のこの著書およびこれに続く彼の 70 年代の仕事の内容についていくつかの論点にわたって検討を加え、それとの関連において Schmitt 以降の貨幣的循環理論の展開の中で提出された議論を論点ごとに取り上げて行きたい。したがって本稿で筆者がめざそうとするのは、Schmitt から始まる貨幣的循環理論の歴史的な包括的サーベイではなく、Schmitt の仕事（それも限られた時期の）を下敷きにしてこれとのかかわ

りにおいて後の貨幣的循環理論の展開をアドホックにとりあげ、この理論の大まかな構造とその問題性を明らかにし、続く貨幣的アプローチとの対比的な検討のための予備作業とすることである。

以下の検討は暫定的に次の各項目にしたがって順次行っていくことにしたい。対象である貨幣的循環理論の論理構造を明らかにするのに好都合と思われる順序を立ててみたが、場合によってはやむを得ず論点が前後することもありうる。2.（信用）貨幣の創造と基本性格、3. 貨幣の尺度機能 4. 貨幣の購買力と価格（絶対的、相対的） 5. 金の役割り 6. 労働（力商品？）と賃金 7. 利潤の発生 8. 利子の支払い 9. 貨幣と金融 10. 資本財とその調達 11. 期間という分析枠組み 12. 均衡と不均衡 13. おわりに

2.（信用）貨幣の創造と基本性格

貨幣的循環理論で基軸的な役割を果たす貨幣はすべて、銀行が無から創造する信用貨幣のみであり、それ自体が「価値的実体」を持つ商品貨幣（「地金貨幣」と貴金属鑄貨）ないし兌換という手続きによってこれを代表する兌換紙幣、また、国家がその貨幣高権によって発行し貨幣発行益（seigniorage）を取得すべく強制通用力を付与された国家紙幣、これらはいずれもモデルから排除される¹⁹。Schmittはこの点を次のように言う。「今日、貨幣はもはや金属でできてはおらず、いかなる金属も代表するものではなくなっている。貨幣を先在する価値物に由来するものとすることはもはや不可能である。紙券と銀行の記帳

¹⁹ といってもこれで貨幣の性格についての Schmitt の立場がはっきりするわけではない。現代の貨幣を、銀行の決して履行されることのない約束を唯一の裏づけとする信用貨幣だとする場合、次の2つの可能性が考えられる。1. 信用貨幣以外のこれらの歴史的に実在した様々な貨幣形態は、現代の資本主義経済を信用貨幣の循環を軸に捉えようとするモデルから排除されるにとどまり、その貨幣としての歴史的存（実）在性は承認されるのか（この場合、非信用貨幣から信用貨幣への歴史的転換について何らかの説明が必要であろう）。2. それとも、非信用貨幣の貨幣性そのものが疑問視され、それらも究極的には貨幣循環モデルに登場する信用貨幣に還元可能であるかあるいはそれらは貨幣とは見なしえないとされるのか、すなわち、貨幣は本質的に信用貨幣でしかありえないとされるのか。Schmitt の理論全体からは彼の立場は2.に近いように思えるが、しかし彼は、「経済的事実の歴史においてしだいに、約束（信用貨幣）が約束された物（重い金属貨幣）に取って代わった」（Schmitt, 66, *ibid.*, p.188）とも言い、約束の内容（商品ないし財としての貴金属）がもともと貨幣であったのが信用貨幣に代位されたと考えているようにも受け取れる。

は《先行する》価値にもはや対応しない。外在的な媒体なしに、信用が貨幣に転成したものである。その結果、現代の現金は物的財貨が絶えず生産され続けているように、絶えざる生成過程にある。絶えず更新される財貨と向き合う永続的な貨幣というイメージは現代世界には通用しない²⁰。「問題はあいかわらず約束の発行である。新しいのはただ次の点である。すなわち、通常の観察によって示されるように、信用貨幣であろうと記帳であろうと銀行の約束は権利上も事実上もれっきとした貨幣として流通する」²¹。

銀行の発行する紙幣はもともと、「内在的価値」のない紙切れが、銀行に保有される「正貨」の代わりである紙幣の所有者の請求に応じて、いつでも額面相当の正貨と交換（銀行債務の支払い履行）可能であることを約束する証書であり、それ自体は「煮ても焼いても食えない」かかる約束証書に対する信用を根拠に、物的財貨と引き換えに紙幣は受け入れられていた。約束に対する信用とは約束内容の履行を前提にして初めて成り立つものであるが、しかし上の引用文で問題にされている約束とは決して履行されることのないものであり、また約束といっても何をいつまでにする約束とも分からない無内容なものである。だからこそ銀行は何らの実体的準備の裏づけもなしに貨幣を無から創造（*création ex nihilo*）することができるのであるが、その創造された貨幣は何ら実体的な価値を代表しないだけでなくそれ自体でもまったく価値を持たないものである。

銀行の貨幣創造と創造された貨幣のこのような性格が、信用貨幣の運動様式とその起点となる銀行の存在性格を規定する。

銀行は債務支払いの約束として貨幣を創造（発行）するが、その債務は銀行が他の経済主体に対して——たとえば掛けで商品を買ったといったような——実際に負った債務ではなく、銀行の発行する貨幣に対して銀行がみずから負うと宣言するに過ぎないものである（こういう債務を Schmitt は「自発的債務（*dettes spontanées*）」と呼ぶが、あえてその内容を特定しようとしても同額の紙幣とでもいうほかないような無内容なもの）。銀行はみずからが負った債務をもって自己の債務を履行すること、いいかえれば、発行した貨幣

²⁰ Schmitt, 66, *ibid.*, p.110.

²¹ Schmitt, 'La monnaie au centre de la répartition', *Revue d'économie politique*, LXXVI, 1966, p.94. この論文は同年に刊行されることになっていた著書の予告でありその内容を簡潔に要約している。

を銀行自身が財やサービスの購入にあてること、はできない。債務履行（支払い）のために使用しうるのは自らが保有する自らのおう債務（対他的には無意味）ではなく、自らが保有する第三者のおう債務のみであり、かかる債務だけが支払手段として貨幣的性格を持ちうる。このように銀行は発行する貨幣を自ら支出することはできず、自己の負う（きわめて無内容な）債務として第三者に貸し付けることができる²²だけである。第三者の手に渡れば、貨幣は銀行の負う債務の証書として財やサービスの購入に支出しうる性格を得ることになる。ただしこのとき貨幣は借り手側の銀行に対する債務ともなっており、一定期間の後に償還されなければならない。財やサービスの購入に支出しうるといってもそれは単なる消費支出（いま消費者ローンは考えない）ではなく、償還を保障しうるような支出つまり生産的投資でなければならない。このことから、銀行による貨幣の貸し付け先および貸し付けられた貨幣の用途は自ずと限定されることになる。

貨幣がこのように銀行から貸し出されると、銀行と借入側との間に債権債務関係が発生する。銀行は貸し付けただけの貨幣を債権として保有することになり、借入側は借りた貨幣額だけの債務を負うことになる。このとき銀行は銀行の外に出て行った貨幣額（量）だけの債務を外部の経済に対して負うと同時に、ちょうど同じだけの債権を貸付相手に対して保有している。つまり銀行にとっては、相殺すればゼロとなる同額の債権と債務が分離して存在していることになる。他方貨幣を借り入れた側は、この貨幣を支出に充てること

²² 銀行による貨幣の貸付は、当然のことながら、一定期間の経過後に（利子を付加して）貸付金を償還する見込みのある相手に対してだけなされる。この見込みがいかなる判断に基づくものか Schmitt の場合には明らかでないが、いずれにせよここでは貸付相手に対する銀行の「信用」が貸付の前提である。信用貨幣の「信用」とは、こうした銀行の側からする信用と、市場の当事者たちの発券銀行（の支払い約束—実際には無内容であるが—）に対する信用という、二つのベクトルをもつ。ただし、前者の信用は銀行という一機関の個別の貸し付け相手に対する判断であり、個々に維持されたり崩壊したりすることはあってもそのことは直ちに全面的な信用システムの崩壊に導くものではないであろうが、これに対して、後者の信用は経済全体を相手に信用貨幣を供給する一機関に対してそれを貨幣として使用する市場全体の判断（というより—しばしば、信用貨幣の約束と同様に無根拠な—心証）にかかっており、もしこれが崩壊すれば重大な帰結を招くであろう。しかし Schmitt をはじめとする貨幣的循環理論では、こうした銀行に対する信用（信任）が何によって支えられているのか、どのように維持されるのか、またその崩壊の可能性ないし危険性は存在するのかどうか、といった類の問題は少なくともモデルの中心論点とはならない。銀行に対する経済社会の信用は、あたかも天から降ってきたかのように与えられたまま揺るがないとされているように見える。

ができるが、銀行に対して同額の債務を負っており、一定の期間の経過の後に一定率の利子を付加してこれを銀行に償還しなければならない²³。このように、銀行にとっても借入側にとっても、最終的にはすべて消滅させられるべき債権と債務の二重構造が生じる。銀行の貨幣発行はすべて貸し出しという形態をとる他ないので、(不良債権化する貸し倒れの可能性を捨象すれば) 同じようにすべて発行元に戻ってくる。そしてこのとき、いわば等量のプラスとマイナスが会ってどちらも消滅する。こうして貨幣は期首に創造され期末に消滅させられる。上の引用文に「絶えず更新される財貨と向き合う永続的な貨幣というイメージは現代世界には通用しない」と言われていたゆえんである。貨幣的循環理論における貨幣は、財貨と同じく・同じリズムで絶えず更新されるものなのである²⁴。

マルクスの商品貨幣(『資本論』の貨幣論では地金貨幣)は、それを所有物とする持ち手を変えつつ転々と流通したえず出発点から遠ざかって行くとされるが、貨幣的循環理論における信用貨幣は原則として、必ず銀行から貸し出しによって経済過程に注入され債務償還という形で再び銀行に戻るという循環的な運動経路を描く。Théorie du circuit の circuit はこのような循環運動とその経路(回路)の双方を意味する。ここではとりあえず、発券銀行を共に出発点と帰着点とするという circuit の基本点だけを示し、両者の間の回路の構造については後に詳しく見ることにする。

²³ 貨幣が銀行から貸し付けられてから銀行に戻されるまでに経過する時間の長さは期間と呼ばれ、期間は貨幣的循環理論における経済分析の単位をなすが、ここには多くの難問が含まれている。これらの問題点は、貨幣を創造する銀行にこの期間のなかのどこでどのようにして利子が支払われるのかという別の難問とともに、後に独立の項目を立てて検討する予定である。

²⁴ Schmittの基本的な貨幣循環モデルでは、このように経済の中を動く全貨幣が期間ごとに新たに創造されては破壊されるとされる。(80年代の貨幣的循環理論内での議論を通じて、このような貨幣の運動は理論的に維持しがたいことが事実上示されている。この点については後に詳しく検討する。)しかし、銀行が創造する貨幣は必ずしもすべて当該期の末に返却されることを予定して貸し出されるわけではなく、このような貨幣は、一期間を観察単位にとればただ経済の中に滞留している貨幣ということになり、貨幣的循環理論のモデルの描く経済の運動に攪乱をもたらすことになる。「しかしながら銀行からの循環経路には漏出口がある。もっとも簡単なケースは、中央銀行からの国庫への特別貸し出しである。このように《貸し付け》られると、貨幣は実際には大部分が発行機関により放棄されるのである、なぜなら、かりに還流が生じるとしても、それは減価した貨幣で行われるだろうからである。また中期手形の割引について言うと、これは還流を棚上げにし遠い将来に引き延ばしてしまうので、貨幣は実際には企業が自分のものにしたも同然となる。[...] 貨幣は、銀行による一切の償還請求からほとんど自由に、生産経済の内部に滞留する。」(Bernard Schmitt, *Monnaie, Salaires et Profits*, PUF, 1966, p.329-330.)

債務が債務を負う当事者のもとに一定期間の後に必ず戻ってきてそこで消滅させられるという、以上のような仕組みによって、最終的に債務履行を迫られてなんの準備もない銀行が窮地に立たされるという事態は決して起こらない²⁵。このようにして「決して果たされることのない約束」は破綻することはない、絶えず再生産されるのである。

以上のような信用貨幣の発行と還流の運動から、この貨幣を創造する銀行は自らは商品を買ったり売ったりする業務に従事することのない存在であることが示される（ただし収入としての利子は商品の購入に支出されるが、これは銀行業務の結果としてであって、銀行業務の一部をなすものではない）。Schmittは次のように、銀行が市場経済の外部に位置するものであることを主張する。「経済の中を流通している貨幣は、定義により、経済の外部に位置する単数または複数の主体が注入する債務である。銀行と経済という二つの《レベル》の区別は実在的である。未払いの購買として定義されるいかなる債務も貨幣にはならない。経済に属するいかなる主体も理由なしに債務を負うことはない。それゆえ、理由なしに債務を負う主体はすべて経済の外部に位置する」²⁶。つまり貨幣は市場の外部からだけ市場に注入しうるのであって、市場で自ら商品の売り買いに従事する主体がその活動（商品取引）の中から生み出すことはできない。このことは、貨幣は市場での交換当事者たちの活動の中から発生したもの（スミスの貨幣起源論、マルクスの貨幣生成論）ではなく、むしろ、市場の外部から注入されこのことによって彼らの交換活動を可能にする、銀行というひとつの「制度」によって作り出されるものである、ということの意味する。貨幣的循環理論ではこのように、銀行は市場経済の外部（ないし、市場経済の存立を可能にするという意味で、上位）に存在するものと位置付けられる²⁷。このことは逆に、貨幣

²⁵ これは単一の発券銀行とその銀行券が流通する経済との関係について言えることであるが、この同じ信用貨幣である銀行券を決済手段として用いる複数の商業銀行相互間の関係、および、商業銀行と貨幣経済との関係においては、最終的な債務履行が現実的な問題になりうる。ただしここでの抽象的なレベルの議論では銀行といえば単一の発券銀行だとされる。

²⁶ Bernard Schmitt, *Théorie unitaire de la monnaie, nationale et internationale*, Editions Castella, 1975, p.21.

²⁷ 歴史的には、銀行という制度は最初中世末期のイタリアの商業都市で商取引にともなう信用関係を扱う機関として発達したとされ、「最初に銀行とその発行する貨幣ありきそして商取引」ではなかったことは明らかであるが、本文での紹介はあくまで貨幣的循環理論におけるすでに生成した貨幣経済のいわば構造分析における貨幣発行機関と貨幣の位置付けにすぎない。したがって、そこでの銀行が現実存在する

は市場経済の内部からは生み出しえないものであり、それが生み出す商品とははっきりと性格を異にしている、ということも含意する。こうして商品貨幣論は明確に斥けられる。

経済の外部に位置する銀行から発行された貨幣は（利子をともなった）回収を前提として貸し付けられるが、このことは貨幣が返済能力のある経済主体に対してだけ貸し付けられることを意味する。経済の中を循環する貨幣は当初（期首に）銀行から発行され貸し付けられた貨幣しかなく、返済が可能のためには（借り入れた貨幣をそのまま返済するという無意味な操作を除外すれば）その貨幣の支出は、返済期限以前に回収しうる形態でなされなければならない。商品の販売だけが（銀行からの借り入れを除けば）貨幣を獲得する唯一の方法であり、したがって借り入れ貨幣の回収可能な支出の方法は、生産活動によって生産物を作り出しこれを販売することをめざす生産的投資のみである。こうして、銀行から貨幣を借り入れうるのは生産企業のみであり、また、その支出方法は「生産要素」の買い入れすなわち賃金の支払いによる賃労働者の雇用である²⁸。（回収可能な貨幣の支出方法としては生産的投資以外に、商品の購入とその販売、そして、借り入れた貨幣を更に第三者に貸し付け利子付きで回収すること、が考えられる。しかし、前者は、期首においては経済にはまだまったく生産物は存在していない——前期の生産物はすべて売り尽くされ最終消費者の手中に帰している——とする貨幣循環モデルの仮定により不可能であり、後者は、貸付先に問題を先送りするだけで解決にならない。）

このようにして銀行から出た貨幣は労働者の手にわたり、彼らの手中で初めて貨幣は収入となり返還義務をともしない自由処分可能な所有対象となるが、同時に今や彼らは企業との雇用関係にあり賃金取得の対価として生産的活動に従事しなければならない。この段階でようやく貨幣はそれを手にするものの自由な処分にゆだねられることになるが、

（した）どのような銀行と具体的に関連付けられるのかは、さしあたり問われない。Schmittの66年の著書には、前資本主義的貨幣や銀行業の歴史的発生についての考察もあるが、これが彼の貨幣循環モデルとどのように関連させられるのかは必ずしも明確ではない。

²⁸ Schmitt, 'La monnaie au centre de la répartition', *Revue d'économie politique*, LXXVI, 1966, p.101. Schmittに限らず貨幣的循環理論では期間単位で貸付・償還の行われる銀行貨幣（短期資金）の企業からの支出はすべて賃金支払いに充てられるものとされる。実際の物的生産が雇用された労働（力）だけで行えるものではないことはもちろん承知されており、雇用以外の生産的投資（原材料、機械、設備）に関してはいま問題にしているのは別の方法で行われるとされている。この点についても後の項目での検討対象とし、とりあえずここでは生産的投資が雇用のみに向けられるという前提を受け入れておく。

信用貨幣は実体的には単なる紙切れ（銀行口座に書き込まれた数字）にすぎず、自由処分といっても、その自由は消費対象を貨幣所有者の自由に購入することに限られる²⁹。しかしこの段階ではまだ市場には購買対象たる生産物は存在せず、貨幣は自由に使えるといっても使いようがない。このような状態の貨幣を Schmitt は、純粋な処分可能性（pure disponibilité）、貨幣を購買力の運搬車両（これ自体は購買対象とはならないつまり商品ではない）にたとえて空の車と呼ぶ。貨幣の購買力は、創造された貨幣が賃金に転化し労働によって生産物が生産され市場に出されることによってはじめて発生する（購買力の充填、空車から積載車両へ変化）。厳密にはこの点にいたってようやく真の意味で貨幣が創造される。すなわち銀行から出てきたままでは貨幣はまだ生成途中にあるのであり、生産活動（その結果としての生産物）との結合によってはじめて貨幣創造過程が完了する。と同時に、こうして購買力を充填された貨幣が現実的に支出されて労働者が消費手段を入手し企業が生産物の販売によって貨幣を回収すると、もはやこの貨幣で買うことのできる生産物は存在せず（購買力の消尽）、しかも、企業は回収した貨幣を貸し付け先の銀行に返済しうるだけである。そして、このように再び空車となり単なる債務となった貨幣が現実的に銀行に戻ると、貨幣はそこで消滅する（以上は単一の期間内ですべてが始まりすべてが完了するという、期間の完結性を無限定に前提する Schmitt の基本的なモデルであるが、このような前提は維持しがたいことについては後に論じる）。

ところで、これまで見てきた貨幣循環のモデルではすべての議論は、経済の動きが一巡するきわめてリジッドに設定された「期間」という枠組みの中で初めて成り立つものであるが、現実の経済は周期と位相を異にする多数の単位から成り立っており、これらを単一の単位に還元するという抽象の操作によってだけ、経済全体を単一の期間を単位として運動するものとして考察することができる。その意味で、貨幣循環モデルはケネーの経済表を想わせるような抽象的なモデルにほかならない。実際には、長短異なる生産期間と異なる期間開始時点を持つ複数の企業が存在する。また銀行にしても、発券銀行たる単一の中

²⁹ 焼却その他交換手段として以外の処分は今考えないとすれば、このことは賃金が当該期間中に全額消費支出に充てられることを意味する。Schmitt のモデルでは賃金の一部が種々の形態の貯蓄や投資に振り向けられることはないとされるが、これは明らかに賃金支出のあり方の実態に反しており、Schmitt 以後の貨幣的循環理論ではこの問題をモデルに取り込もうとする試みが行われている（後述）。

中央銀行と、ここから借り入れを行うと同時に預金メカニズムによって独自に信用（貨幣）創造を行う複数の商業銀行が存在する。これまで見てきたモデルでは、これらが一つの銀行（その性格は必ずしも明確ではない）、一つの企業、そしておそらく一人の労働者に還元されているとあってよいであろう。Schmitt のものをはじめとする貨幣的循環理論のモデルはいずれも多かれ少なかれこのように抽象的な性格を持ち、具体的な経済分析のためのインプリケーションを引き出すには相当な距離を埋めなければならない。

3. 貨幣の尺度機能

前項では、銀行から発行される貨幣の信用貨幣としての基本性格とこの性格に規定されるその循環的運動経路について主に Schmitt の 66 年の著作によりつつ紹介を試みた。本節ではこのようにして経済過程を循環する信用貨幣の尺度機能についての貨幣的循環理論の立場を、主として同じ Schmitt の 75 年の著作（既出）によりながら見ていくことにしたい。貨幣の機能というと、一般的には価値尺度・流通手段・蓄蔵貨幣という 3 つの機能があげられるが、前項に見たところからも明らかなように、一期ごとに創造されては消滅する貨幣的循環理論の貨幣には価値保蔵の機能はありえず³⁰、この項では通常の貨幣機能の名称にならば貨幣の価値尺度に相当する機能について考察し、流通手段に相当する機能は次項で取り上げることにする。

貨幣による生産物の尺度（生産物の価値の尺度ではない）についての Schmitt およびおそらく貨幣的循環理論派一般の見解は、彼の 75 年の著書 *Théorie unitaire de la monnaie*…（『貨幣の統一理論…』）の 20 ページに及ぶ序文 *création monétaire*（「貨幣創造」）の中に集中的に書き込まれている。ここでは主にこの序文を参照しつつ彼の貨幣の尺度機能についての見解を紹介する。

³⁰ ただしこれは、期間の完結性を厳密に想定する（一期間中にすべてが始まりすべてが終わる）Schmitt の貨幣循環モデルにおいて言えることであって、それ以後とりわけ Graziani によって、このモデルに、期間から期間を通じて銀行に還流せず経済過程に残留する「貨幣ストック」の存在を導入しようとする試みがなされるが、こうなると貨幣は様々な動機から「基本モデル」の循環経路をはずれて保蔵の対象となり、価値尺度と流通手段にとどまらない追加的な貨幣機能が認められることになる。と同時に基本モデルに新たな問題を提起する。だが、本項ではこの問題は捨象し、後にあらためて論じることとする。

価値尺度という言葉を知くと、古典派やマルクスの価値尺度論が思い起こされるが、彼らの価値尺度論は例外なく、商品貨幣の素材的実体をなす貨幣商品の価値的特性の吟味をその内容としていた。前項に紹介した信用貨幣を前提とする Schmitt の（価値）尺度論には、表向き古典派やマルクスの価値尺度論に対する批判的言及はほとんど含まれていないが、彼の議論の全体は労働価値論と商品貨幣論に基づいた価値尺度論に対する事実上の反対論をなすものであり、これにとって代わる貨幣の尺度機能についての見方を打ち出そうとするものである。

この目的で Schmitt が最初に主張するのが二つの根本的に異なる尺度のあり方であり、両者の区別の必要性である。ひとつは計数尺度（*measure-dénombrément*）、もうひとつは次元尺度（*measure-dimension*）である（いずれも彼独自の用語でありここでは仮の訳語をあてておく）³¹。

次元尺度というのはある共通の次元（通常は物理的なもの、例えば長さ・面積・体積・距離・時間。物理的計測にかからない例えば「価値」のような次元も考える。）に属する大きさを測ることをいう。例えば長さを測る場合、まず一定の尺度単位（例えば1メートル）を設定し、この1メートルの長さを尺度標準とする。この場合尺度するということは、尺度そのものと同様に長さ（空間的延長）という「共通の質」をもつ一定の長さの被尺度対象に尺度をあててみて、その対象が尺度単位の何回分に相当するかを数え、その数字に尺度単位名（メートル）を付した名数として表現することである。このように次元尺度は、まず尺度と尺度対象が共有する「共通の質」の単位量（次元単位）を設定し、次に尺度対象がこれの何単位に相当するかを尺度をあてて数える、という二段にわたる手続きからなるが、この尺度様式の決定的な特徴は共通の次元（質）の前提にある。したがって、次元尺度の標準はそれ自体が一定の次元に属することを必要とする。上の例では長さの標準は1メートルという長さであり、標準自体が長さでなければ長さを計ることはできない³²。

³¹ Schmitt 75, *ibid.*, p.16.

³² これはまさにマルクスにおける価値尺度の理解の仕方そのものである。マルクスにおいては、尺度（貨幣）と尺度されるもの（商品）が共に価値という「共通の質」を持ち（なぜなら両者共にもともと同じように商品であったから）、それゆえ尺度と被尺度の関係も必ずしも一方的ではなく逆転可能とされる（この点はリカードの価値尺度論でもまったく同様）。『剰余価値学説史』第3巻でベイリーによるリカード価値論批判を論じた箇所、マルクスは価値の尺度が空間の中の2点間の距離の尺度（測定）と同じく、

これに対して計数尺度の標準は単なる数であり、したがって原理的にはその標準単位は1という数字（無名数）でしかない。計数尺度をするという事は数を数えるということである。「こうして1という数がある集まりの諸対象に順次あてがわれていく。n回あてがわれれば、その集まりはn個の対象を含むと言われる。標準がそれ自体数でなかったならば数を数えるのに役立ち得ないであろうということは明白である。ある集まりを尺度するのが目的なのだから、問題はその集まりを構成する諸対象を数えることである。この点からして、標準がある次元として定義されることを要求するのはばかげているであろう。また同じように、標準とそれによって尺度される対象とに共通の——長さといったような——質を探求するのも無益であろう」³³。Schmittによれば貨幣の尺度機能はまさにこのようなものである。貨幣は銀行から発行された債務証書であり、その保有者に債務と等量の銀行に対する（実体のない）債権を与えこの債権が貨幣として流通するのである。この債務に等しい債権の大きさが貨幣量なのであるが、この量は債権＝債務と同じく何らの実体的な次元（例えば重量）とも関連のない単なる数字でしかなく、その単位は必然的に1である。こうして原理的には信用貨幣の量はただの数なのであるが、実際にある時代にある地域で流通する貨幣にはそれぞれ固有の単位名称（円、ドル、ユーロ等々）が付され相互に区別される。こうして貨幣の量的表現は次元尺度における表現と同じように名数をもつ

尺度と被尺度に共通の単位（次元）を前提とすることを次のように述べる。「二つの物の距離を論じる場合に、われわれが論じているのは、空間のなかでの二つの物の相違なのである。したがって、われわれは、二つのものがともに空間のなかに含まれていること、を想定しているのである。したがってまた、われわれがその二つの物を同等化するのは、ともに空間のあり方としてである。そして、同等化したのちにはじめて、空間の観点のもとで、われわれは、二つのものを、空間の違った二つの点として区別するのである。空間に属しているということが、それらの物に共通な単位なのである。だが、相互に交換される諸物のこのような単位とは何であろうか？」(Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert*, MEW, Bd.26Ⅲ, S. 141-2. 引用文中の／はパラグラフの変わり目。) また『経済学批判』の第一章で商品の価値表現（尺度）を論じた箇所、マルクスは尺度関係が関係の両項に共通の質を前提とするがゆえに相互的であり逆転可能であることを次のように述べている。「交換価値としては、それぞれの商品は、他のすべての商品の交換価値の共通の尺度として役だつ排他的な商品であるとともに、他方では、他のそれぞれの商品が多くの商品の全範囲でその交換価値を直接にあらわす場合の、その多くの商品のうちの一つにすぎない。」(Do., *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, MEW, Bd.13, S.27) このように、マルクスやリカードの価値尺度論は、Schmittの視点からは価値を次元的に尺度しようとする理論であり、棄却されるべき誤謬だということになる。

³³ Schmitt 75, *ibid.*, p.17.

てなされるが、しかしこのことは貨幣量が一定の物理的ないし形而上的な次元を有するというを意味するのではなく、単に特定の信用貨幣のある一定の量であることを示すにすぎない。貨幣による生産物の尺度は両者に共通な次元を何ら前提するものでも、また、尺度関係の形成によって両者を共通の次元に還元するものでもない。一方は単なる数（と場合によってはこの数を記入する媒体）のままであり、他方は単なる商品（貨幣と引き換えに譲渡される物的・非物的な生産物）のままであるにすぎない。生産物とは異質な数の世界に属する貨幣をもって生産物を数え、両者のあいだに対応関係（correspondance）を形成すること、これが貨幣による生産物の尺度である（生産物の価値の尺度ではない）。

貨幣による生産物の尺度が以上のような計数尺度であるとする、この尺度関係の両項には共通の質は存在しないことになる。貨幣にも生産物にもまずそれ自体の価値があつて、それらの関係として尺度関係が成り立つのではない。つまりどちらにも、関係に先立つ価値というものは存在しない。商品貨幣論を完全に解体してしまうと、貨幣理論史上延々と論じられてきた「貨幣の価値」についてもあっさりと次のように片付けられる。「x 単位の貨幣があるとしよう。その価値はいくらか。この問題自体がばかげている。もし x 単位の中にいくらの単位が含まれているかを言うということなら、答は x である」³⁴。また貨幣と交換される商品の価値は、貨幣との交換割合としての価格——値札に付された価格か現実に販売された価格かはいま問わない——でしかない。貨幣との関係を離れて商品自体のうちに独立自存する価値はない。したがってまた、商品相互の価値関係は、それぞれの商品の貨幣との関係を介した関係（関係の関係、割合の割合）という間接的な仕方しか表現されない。等価関係も貨幣と生産物の関係について言えることではなく、貨幣と同等の関係を持つ（つまり価格が等しい）生産物どうし関係としてしかありえない。このような性格を持つ貨幣の計数尺度の機能は、物理的な単位をもってしては比較・合算・差引きという数量的な操作をすることができない異質な生産物どうしを、相互に量的に比較可能な価格という数として表現し、このような貨幣数量間関係としての経済過程の分析を可能にする、というところにある。

ところで、数としての貨幣のどれだけがある生産物に対応するのか、つまり、その生産

³⁴ *ibid.*, p.14.

物の価格はどのようにして決まるのか、古典派やマルクスの価値論に関連するこの問題は貨幣的循環理論においてはどのように扱われるのであろうか。どうして生産物 A にはある価格が付され生産物 B には他の価格が付されるのかは答えることのできない問題であり、このように問うこと自体が間違いだ、あるいは、各生産物に様々な価格が与えられていればただ与えられたものとして受け取るほかない（これは説明の対象ではない）、というのは、この点についての Schmitt の立場ではない。反対に、対応関係はどのようにでもありうるものではなく、この関係がどのようにして規定（規制）されるかは貨幣的循環理論の重大問題として意識されている。この点について彼は 75 年の著書の中で繰返し言明し自己の立場を強調している。「貨幣は生産的サービスと生産物の数値表現尺度である。ここで提起される大問題は、貨幣と生産物のあいだに成り立つ対象の対象に対する対応関係の起源の問題である。この問題の解決が本書の第一部〔国民貨幣、第二部は国際貨幣〕の主要な対象である」(Schmitt, *ibid.*, p.18)。「貨幣の購買力という概念は〔貨幣の価値とは異なって〕無意味ではない。国民貨幣の購買力とは、貨幣単位と生産物のあいだに成り立つ対応関係である。〔…〕この対応関係は問題であり、疑いもなく、貨幣理論の中心問題でさえある」(*ibid.*, p.25)。「この対応関係の因果的説明は貨幣理論の主要な任務である」(*ibid.*, p.31)。だがこのように言われてはいるものの、Schmitt が 75 年の著書その他において提案する解決方法は理解しやすいものではないし、問題を多く残しているように思われる。項をあらためて、その大要について批判的に考察してみよう。